千葉科学大学紀要　13.　89−95.　2020
【原著】

病院における清拭の現状と教育方法の改善

−第一報−

Current status of Bed bath in hospitals and improvement of educational methods

— First report —

米倉　摩弥・菅谷　しづ子・高橋　方子・鈴木　康宏・冨樫　千秋

Maya YONEKURA, Shizuko SUGAYA, Masako TAKAHASHI,
Yasuhiro SUZUKI and Chiaki TOGASHI

清拭はテキストに載っている方法として木綿のタオルと湯と石鹸が挙げられるが、これまで病院では患者共有の木綿の蒸しタオルが使用されてきた。しかし近年、木綿の蒸しタオルにはセレウス菌が繁殖しているという報告があり、ディスポ不織布を使用する病院も増えてきた。感染予防を主とするなら現在テキストにはないディスポ不織布による清拭が一般化されることも考えられる。そこで実習病院の現状を把握し、現場と乖離しない看護技術を教授する内容を考える第一段階として、主に基盤看護学・成人看護学・老年看護学の実習病院の看護師にアンケート調査を行った。木綿タオルを「よく使用する」「時々使用する」と回答したのは34.5%、ディスポ不織布を「よく使用する」「時々使用する」は81.4%で、そのどちらもベースンの湯を「よく使用する」「時々使用する」はそれぞれ5.9%と6%で、テキストに載っている清拭はほぼされていないことがわかった。

1．はじめに

看護師は「療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする」と保健師助産師看護師法の第五条に記されている。「療養上の世話」の中には食事や清潔保持、排泄への世話などが含まれる。入院期間が長かった頃は、病院で生活することから「療養上の世話」が重要視されていたように思うが、近年では平成29年における一般病床の平均在院日数は15.7日という数字があり[1]速やかに治療して退院することから、看護師の業務が「診療の補助」に重きが置かれるようになっている現状は否めない。「療養上の世話」の中の"皮膚の清潔"を保つ方法として「清拭（身体を拭く）」という方法がある。多くのテキストで『50度程度の湯を準備』し『ウォッシュクロスを手に巻いて』『石鹸を付けて拭く』方法が書かれている（参考文献参照）。この方法により看護師1人で全身を清拭すると、経験上30～45分の時間がかかる。そのため病院ではウォッシュクロスを濡らして保温器（清拭車）にいれて蒸しタオルを作り、それで清拭をすることが行われてきた。しかしこの蒸しタオルには感染の問題があり、村松らは、綿タオルと化繊タオルを比較して『再生綿タオルには *Bacillus cereus* による感染の問題がある。（中略）*Bacillus cereus* は高pHや低温、高潮濃度、高圧である極限環境にも適応することから、徹底した消毒が行われても完全に死滅した状態にはならない』と述べている[2]。

連絡先：米倉摩弥　myonekura @cis.ac.jp
千葉科学大学看護学部看護学科
Department of Nursing, Faculty of Nursing, Chiba Institute of Science
（2019年9月30日受付，2019年12月16日受理）

また鎌田らは『洗濯工程に熱水以外の消毒工程が組み込まれている施設は半数以下であった』と述べている[3)]。

これらの先行研究をもとに、病院から蒸しタオルは廃止される傾向にあり、近年ディスポーザブル不織布を用いた清拭が行われるようになって来ている。しかし藤原らの『不織布おしぼりでは開始時の中心部の測定温度は50～60℃であり（中略）測定終了時（10分後）には中心部、表面部とも30℃程度に低下していた』という研究結果[4)]を見るまでもなく、実際に不織布おしぼりを使用して清拭をするとすぐに冷たくなることは、実施した看護師ならみんな経験していることと思われる。

また清拭の目的は単に身体の清潔を保つためではない。参考文献に述べたようなテキストに『マッサージや温熱刺激を使うことにより、循環の促進や自立神経・感覚神経の刺激となる』『自動・他動運動の機会となる』『爽快な気分がもたらされ、前向きな気分になる』『心地よい睡眠がもたらされる『全身状態の観察をする』『患者とのコミュニケーションの場となる』等と書かれている。

感染予防を考えれば、おそらく蒸しタオルは使用しない方向となるであろう。ディスポ不織布を用いて上記の清拭の目的に到達させるにはどのような方法があるのかを考える第1歩として、まずは現場で実際に清拭を行っている看護師に質問紙調査をし、現状を調査したので報告する。

２．研究方法

２．１　目的

本学臨地実習病院のうち、基盤看護学、成人看護学、老年看護学の各実習で使用している病院の清拭の現状を知り、今後の看護技術教育の改善の一助とすることを目的とする。

２．２　調査施設および対象

本学臨地実習において、基盤看護学、成人看護学、老年看護学の各実習で使用している病院のうち、調査協力の得られた6病院18病棟に勤務する看護師、准看護師を対象とした。

２．３　方法

1）調査内容と方法

2019年8月8日から8月20日に調査を行った。筆者らが作成した質問紙を用いて自記式アンケート調査を実施した。各病院の看護部にアンケート用紙の配布を依頼し、解答記入済みのアンケート用紙は封筒に入れ封をして病棟に保管し、後日回収に行った。

2）調査内容

対象者の背景、清拭に使用する物品、清拭の効果、一日に受け持つ患者数、清拭にかかる時間等17項目について回答を求めた。

２．４　分析方法

Excel 2013を用いて単純集計を行った。

２．５　倫理的配慮

調査対象者に対して、解答は自由意志によるものであり回答しないことによる不利益はないこと、調査は無記名で行われ、所属病院や病棟、個人が特定されないこと、データは統計的に処理をすることを文書で説明し、質問紙の提出をもって同意を得たものとした。

なお、本研究は千葉科学大学倫理審査委員会の承認（NoR01-1）を得て行った。

３．結果

調査協力の得られた6病院18病棟において685人に調査を依頼し、556人から解答が得られた。その内欠損が多く認められた対象者を除いた結果、有効回答数は518人（93.1%）であった。

３．１．対象者の背景

看護師免許を取得した学校は、高校専攻科25人（4.8%）、専門学校422人（81.5%）、短期大学15人（2.9%）、大学48人（9.3%）、その他3人（0.6%）、無回答5人（1.0%）であった。持っている資格は（複数回答あり）、准看護師（118人）、看護師（501人）、保健師（22人）、認定看護師（4人）その他（11人）であった。現在の職位は、スタッフ446人（86.1%）、主任54人（10.4%）、師長14人（0.4%）無回答4人（0.6%）であった。勤務している病棟は慢性期病棟126人（24.3%）、急性期病棟349人（67.4%）、その他29人（5.6%）、無回答14人（2.7%）であった。所属病棟の看護配置は、7対1　425人（82.0%）、10対1　69人（13.3%）、それ以外13人（2.5%）、無回答11人（2.5%）であった。勤務病棟の看護体制については、プライマリーナーシング113人（21.8%）、機能別看護7人（1.4%）、パートナーシップナーシング279人（53.9%）、チームナーシング84人（16.2%）、その他5人（1.0%）、無回答30人（5.8%）であった。新人看護師または学生の指導経験の有無について、新人看護師の指導経験がある386人（74.5%）、ない117人（22.6%）、無回答15人（2.9%）、学生の指導経験がある360人（69.5%）、ない141人（27.2%）、無回答17人（3.3%）、プリセプターの経験がある319人（61.6%）、ない178人（34.4%）無回答21人（4.1%）であった。また、2016年4月から2019年3月の間で、教育担当委員等の学生指導等責任のある役割をしたもの67人（12.9%）、していない424人（81.9%）、無回答27人（5.2%）であった。

３．２．清拭の現状

清拭については8項目について回答を求めたが、今回はこの中から【清拭で使用する物品】【清拭の効果】について報告する。

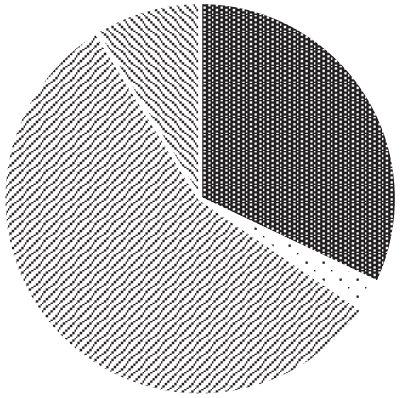
図1は清拭で使用する物品のうち、拭く道具として「木綿タオル」の使用頻度について示したグラフである。「木綿タオル」をよく使用すると答えたのは32.0％で、以下、時々使用する2.5％、使用しない56.6％、無回答8.9％であった。

図2は同様にディスポ不織布の使用頻度について示したグラフである。「ディスポ不織布」をよく使用すると答えたのは68.7％、時々使用する12.7％、使用しない22.6％、無回答6.0％であった。

グラフでは示せていないが、6.0％が「木綿タオル」「ディスポ不織布」ともに　よく使用する　と答え、1％が「木綿タオル」「ディスポ不織布」ともに　使用しない　と答えた。

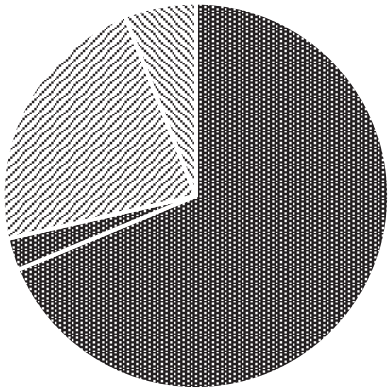
図3は清拭に使用する物品について示したグラフである。「ベースンの湯」をよく使用する・時々使用すると答えた合計は7.1％で、以下同様に「石鹸」は18.5％、「洗浄剤」は69.2％、「沐浴剤」5.8％、「保湿剤」95.9％、「ディスポーザブル手袋」98.1％、「マスク」92.3％、「エプロン」97.3％であった。

図1　清拭時に木綿タオルを使用する頻度　(N=518)



よく使用する　時々使用する　使用しない　ＮＡ

図2　ディスポ不織布を使用する頻度　(N=518)



よく使用する　時々使用する　使用しない　ＮＡ

図3.清拭に使用する物品　(N=518)

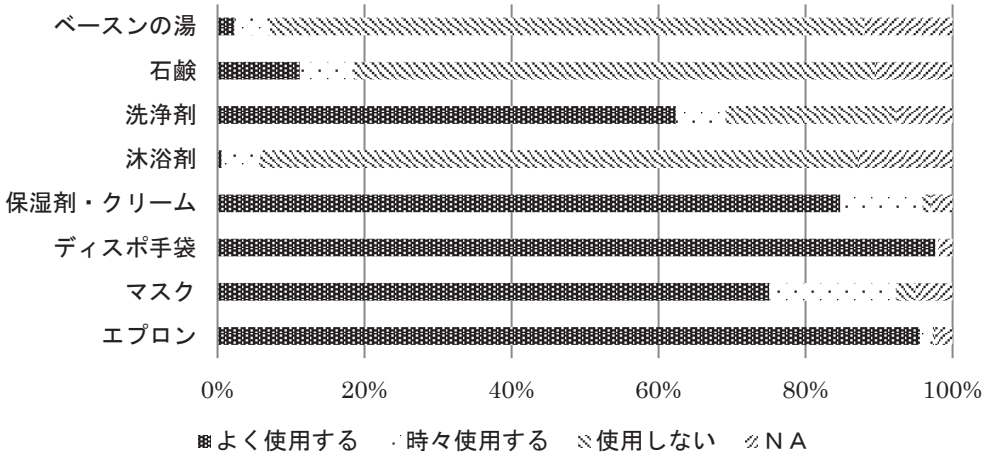


図4は清拭で使用している物品の中で「木綿タオル」をよく使用する・時々使用すると答えたもの（以下　木綿タオル群　とする）が清拭で使用する物品について示したグラフである。よく使用する・時々使用すると答えたのはディスポ不織布26.0％、ベースンの湯5.9％、石鹸36.7％、洗浄剤44.4％、沐浴剤5.3％、保湿剤95.3％、ディスポ手袋99.4％、マスク97.6％、エプロン98.8％であった。この結果から､「木綿タオル」は使用しても「ベースンの湯」を6.0％程度しか使用していないことが分かり、このことから「木綿タオル」は乾いたタオルではなく、ホットキャビンで温められた湯を含んだタオルを使用していることが分かる。

図5は清拭で使用している物品の中で「ディスポ不織布」をよく使用する・時々使用すると答えたもの（以下　ディスポ不織布群　とする）が清拭で使用する物品について示したグラフである。よく使用する・時々使用すると答えたのは木綿タオル2.8％、ベースンの湯8.3％、石鹸9.5％、洗浄剤83.4％、沐浴剤5.5％、保湿剤98.1％、ディスポ手袋99.2％、マスク92.0％、エプロン98.4％であった。

図6は清拭の効果について示したグラフである。“全身の観察”にとても効果がある・少し効果があると答えた合計は97.7％、以下“自動・他動運動を促す”は75.4％、“褥瘡予防ができる”85.1％、“マッサージ効果により神

図4　木綿タオル群が清拭に使用する物品

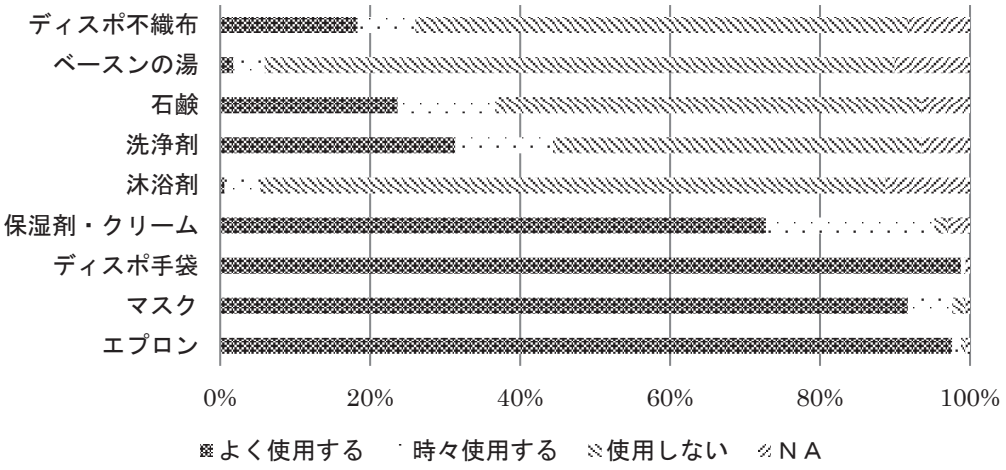
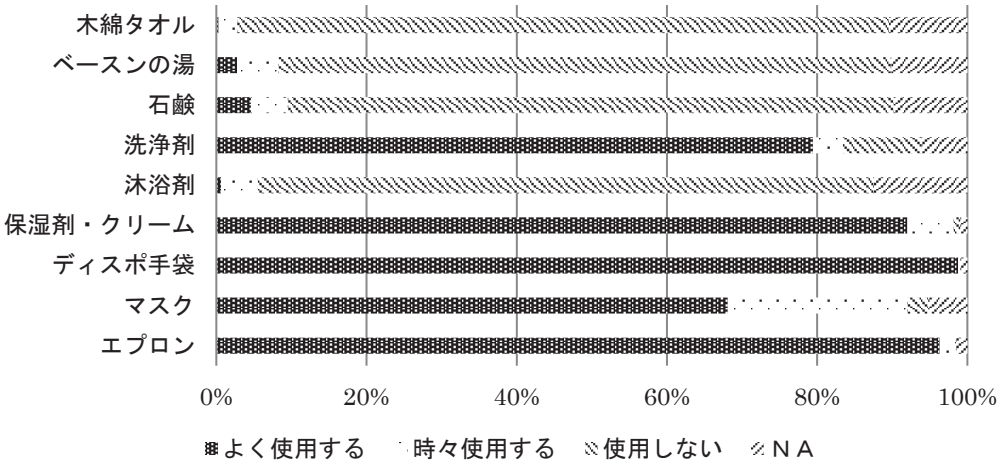


図5　ディスポ不織布群が清拭に使用する物品



経系を刺激する”48.5％、“前向きな気分をもたらす”49.2％、“温熱効果をもたらす”56.0％、“爽快な気分をもたらす”88.2％、“マッサージ効果により循環を促進する”44.4％、“睡眠を促す”31.9％、“リラックスした気分をもたらす”72.8％、“皮膚を清潔にする”94.6％であった。

図7は木綿タオル群の清拭の効果について示したグラフである。“全身の観察”にとても効果がある・少し効果があると答えた合計は98.8％、以下“自動・他動運動を促す”は74.8％、“褥瘡予防ができる”77.8％、“マッサージ効果により神経系を刺激する”45.7％、“前向きな気分をもたらす”39.1％、“温熱効果をもたらす”63.2％、“爽快な気分をもたらす”83.6％、“マッサージ効果により循環を促進する”53.2％、“睡眠を促す”29.3％、“リラックスした気分をもたらす”68.5％、“皮膚を清潔にする”91.2％であった。

図6　清拭の効果

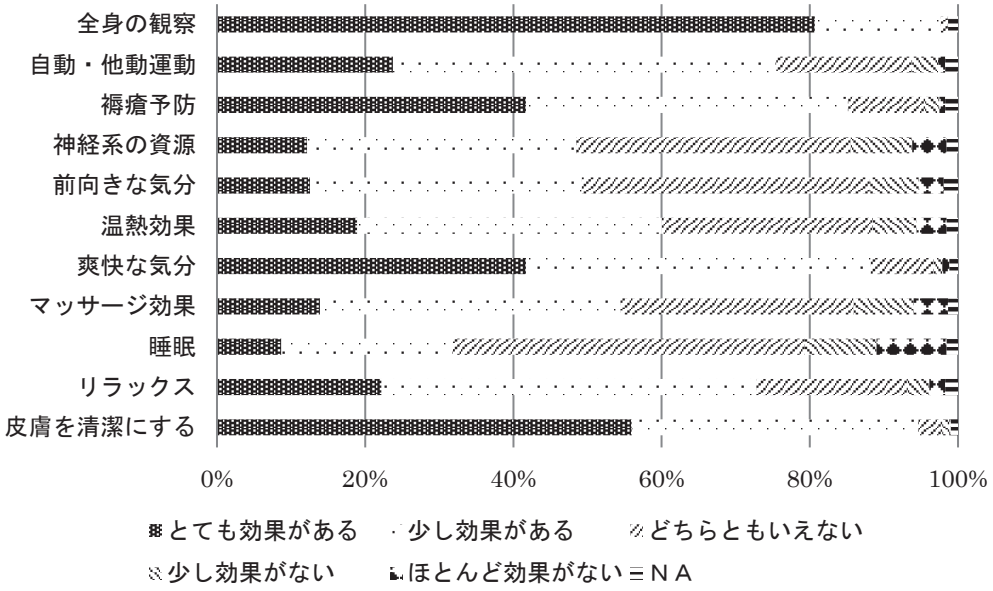


図7　木綿タオル群の清拭の効果

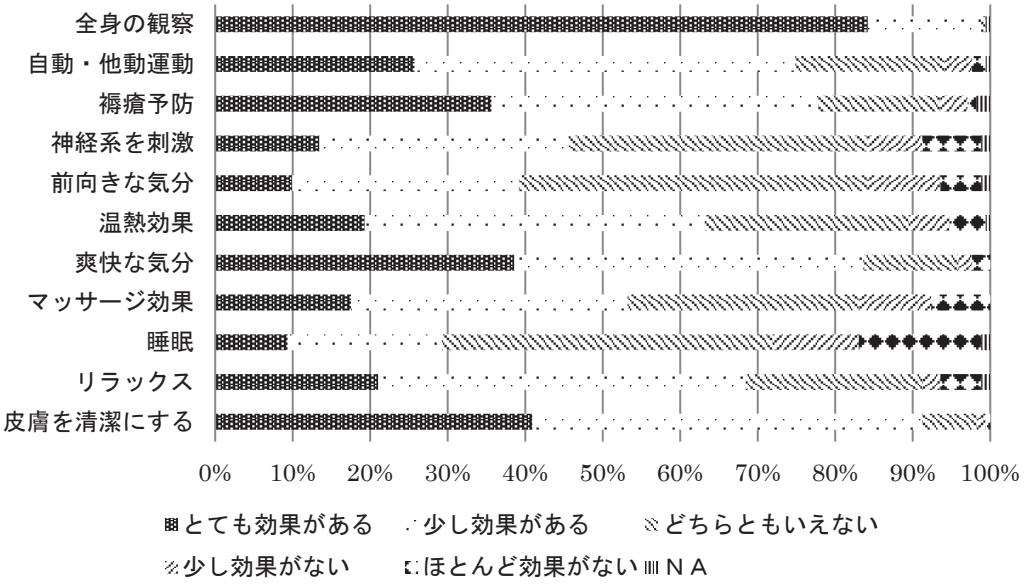


図8はディスポ不織布群の清拭の効果について示したグラフである。“全身の観察”にとても効果がある・少し効果があると答えた合計は98.8%、以下“自動・他動運動を促す”は77.2%、“褥瘡予防ができる”90.6%、“マッサージ効果により神経系を刺激する”50.6%、“前向きな気分をもたらす”55%、“温熱効果をもたらす”59.4%、“爽快な気分をもたらす”92.3%、“マッサージ効果により循環を促進する”55.9%、“睡眠を促す”33.5%、“リラックスした気分をもたらす”76.4%、“皮膚を清潔にする”98.2%であった。

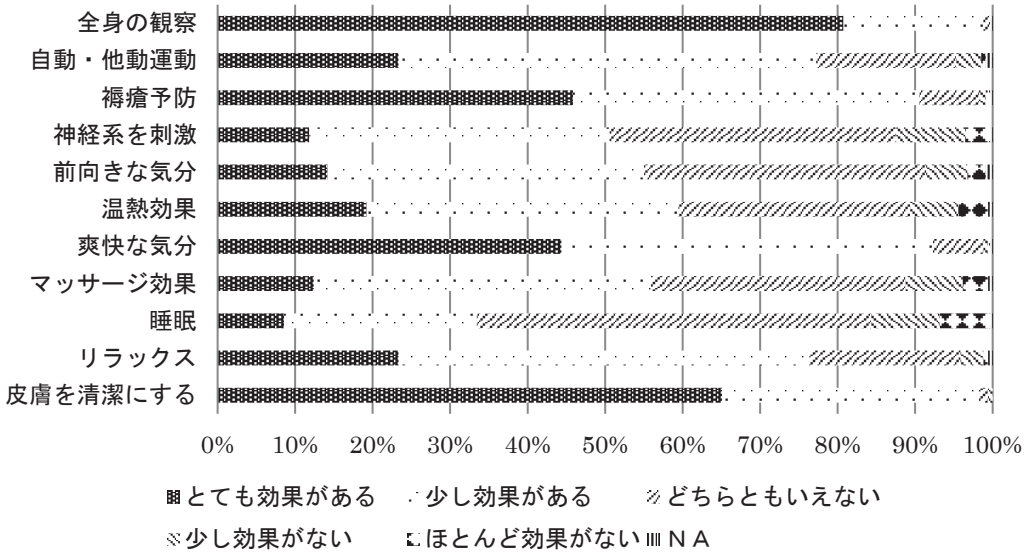
4．考察

本学が実習している成人・老年系の病院、病棟においては、清拭のときに使用する拭く道具は、図1.2のように木綿タオルをよく使う・時々使うが32.0%に対してディスポ不織布が68.7%と、ディスポ不織布の使用の方が多かった。本学の学生は臨地実習において病院や病棟が変わることで「木綿タオル」と「ディスポ不織布」2種類の物品を使用して清潔の援助を行っていると考えられる。また、図4.5より、木綿タオル群は、ディスポ不織布をよく使う・時々使うが26.0%に対して、ディスポ不織布群は木綿タオルをよく使う・時々使うが2.8%という結果で、木綿タオルが主流の病院・病棟においてもその中の3割程度がディスポ不織布も使う反面、ディスポ不織布が主流の病院・病棟においては、ほとんど木綿タオルを使用して清拭がされていないことがわかった。また、図4にあるように、木綿タオル群はベースンの湯をよく使う・時々使うのは5.9%、以下同様に石鹸36.7%、洗浄剤44.4%という結果から、おそらく約半数の清拭が洗浄剤を付けた身体を蒸しタオル（濡らした綿タオルを保温器で温めたタオル）で拭き取るような清拭を実施していると考えられる。ディスポ不織布群も同様に、図5にあるようにベースンの湯をよく使う・時々使うは8.3%、以下同様に石鹸9.5%、洗浄剤83.4%という結果から、木綿タオル群と同様洗浄剤を付けた身体をディスポ不織布で拭き取るような清拭を実施していると考えられる。

使用物品に若干の相違がある木綿タオル群とディスポ不織布群であるが、各々の清拭の効果について“とても効果がある”“少し効果がある”の合計で比較すると、図7、図8より、褥瘡予防ができる、が木綿タオル群が77.8%なのに対してディスポ不織布群が90.6%、“前向きな気分をもたらす”が木綿タオル群で39.1%に対してディスポ不織布群は55%の2項目に15.0%程度の違いがあったほかは、ほとんどの項目に違いは見られなかった。すぐに冷えるディスポ不織布タオルを用いて木綿タオルとほぼ同じ効果をもたらしている方法について、今後調査し、教育方法に取り入れる必要がある。

これまで参考文献に挙げてあるような看護技術のテキストにおいて、清拭は入浴できない患者に入浴した気分をもたらすように実施する、ということが前提とされていた。そのための物品としてa.50度程度の湯を用いる。b.入浴したのと同じ気持ちになれるよう、石鹸を使用する。c.タオルは端から冷えて患者に冷感を与えるため、ウォッシュクロスを手に巻いて使用する。d.所定の巻き方は、タオルの端が出ず看護師の爪が当たらず、拭く面

図8　ディスポ不織布群　清拭の効果



はタオルが3回重ねて折られて9枚となっており、タオルが冷めにくく、適度な圧をかけて拭くことができる。等と書かれており、冷点の多い背部には2枚重ねたタオルで熱布清拭をすることで、より気持ちよさが増し、入浴したのと同じ気持ちになれる、とも書かれている。また、清拭の効果については今回のアンケート項目に挙げた内容で、筆者らはこれらのテキストに書かれていることを参考に授業をし、これらを到達目標として演習を行ってきた。

茂野は実習指導中、不織布おしぼりで清拭をする病棟で、患者さんから『拭かないのは我慢できるけど、寒いのは我慢できない』『10日くらいお風呂に入るのを我慢する」と言われたと延べている。また不織布おしぼりは患者をアレルギーの危険性にも晒している』とも述べている[5)]。感染予防に優れた不織布おしぼりであるが、全ての患者の満足にまでは至っていないということであろう。

澁谷は、『清拭が看護の原点であるという看護学研究者の認識は、現場の看護師の認識とは必ずしも一致していない可能性がある』と述べている[6)]。筆者も病院に実習指導に赴いた時は、学生と一緒に時間をかけてテキストに近い清拭を実施することがある。しかし茂野は『「診療報酬加算」のための情報入力』のため『不織布おしぼりを受け入れざるを得ない状況を生んでいる』とも述べている[5)]。入院基本料の水準を守るために多くの書類に記録をすることに時間を取られ、高度な医療の対応したミスの許されない「診療の補助」をしていては、「療養上の世話」まで時間が確保できないというのも現実かと思われる。

日々進歩する医療の中で、看護専門職にふさわしい看護技術の中の清拭を提供するにはどうすれば良いか、継続して研究を重ねて行きたい。

謝辞

今回の研究にあたり、普段から学生が実習でお世話になっている多くの看護師のみなさまが、お忙しい勤務の中アンケートに回答していただき、誠に感謝申し上げます。

引用文献

1） https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000187182.pdf#search　厚生労働省　入院医療（その8）、
（参照2019-12-06）
2） 村松千鶴,深井喜代子:綿タオルと化繊タオルの細菌学的検討.日本看護技術学会誌.Vol.13 No.3 pp243-246.2014
3） 鎌田明,菅原えりさ:国内医療施設を対象とした患者清拭タオルの管理に関する実態調査.医療関連感染.9号.pp52-60.2016
4） 藤原恵美,佐々木新介:不織布おしぼりの温度変化に関する基礎的検討.ヒューマンケア研究学会学術集会抄録集（5）.19.2013
5） 茂野香おる:病院看護の変容.看護実践の科学.Vol44 No.9 pp27-33.2019
6） 澁谷幸:看護師にとっての清拭の意味.日本看護研究学会雑誌.42巻.1号.2019

参考文献

香春知永,齋藤やよい:基礎看護技術.改訂2版.南江堂.東京.271-275.2016
志自岐康子,松尾ミヨ子,習田明裕、金壽子編:基礎看護学.改訂6版.メディカ出版.東京.252-254
阿曽洋子,井上智子,氏家幸子:基礎看護技術:第7版.医学書院.東京2014